Newspaper in Education

NIEニュース

エヌ・アイ・イー

Newspaper in Education

第84号
2016.7.15

◉特集・生活と学びの接点をつくる▶1～3　◉ニュースパーク（日本新聞博物館）リニューアル／アドバイザー紹介▶4～5　◉第２回 NIE 教育フォーラム報告／ニュースを「分解」する力▶6～7　◉〈NIE でいきいき〉〈NIE あれこれ〉▶8

©2016年 日本新聞協会

編集・発行　一般社団法人 日本新聞協会　TEL：03-3591-4410（NIE担当）　FAX：03-3592-6577　e-mail：nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町 2-2-1　日本プレスセンタービル　[http://nie.jp] [http://www.facebook.com/Nie47]

特集

生活と学びの接点をつくる

中央教育審議会で次期学習指導要領改訂に向けた検討が進んでいる。改訂の基本的な考え方とポイントが示された「論点整理」では、教育と社会を結び付ける必要性や対話による協働的な学びが求められている。社会に開かれた教育課程、すなわち教室での学びが実生活や社会とつながっていることを児童生徒にいかに実感させるか。NIEが果たす役割について考察する。

社会参画へ主体性培う

大分県NIE推進協議会会長
大分大学教育学部教授
NIE全国大会大分大会実行委員長
堀　泰樹

文部科学省の中教審「教育課程企画特別部会　論点整理」（2015年8月26日）の中に、「学びを推進するエンジンとなるのは、子供の学びに向かう力であり、これを引き出すためには、実社会や実生活に関連した課題などを通じて動機付けを行い、子供たちの学びへの興味と努力し続ける意志を喚起する必要がある」（17ページ）という記述がある。

学校で学ぶことと実社会や実生活との関わりを意識した課題による学びが求められている。

課題解決に向け 記事活用

そのための一つの手立てとして新聞活用や新聞づくりがある。新聞には「実社会や実生活に関連した」記事が満載されている。新聞を学習材として活用し、「実社会や実生活に関連した課題」を発見させ、課題解決に向けた主体的・協働的な学びを実現したい。その中で教科等の目標を達成し、それを通じて社会に参画する意識を育てるところに、NIEの役割が表れてくる。授業等で、「実社会や実生活に関連した」話題や主題とそれに関わる新聞記事を、どのように学習材化し、組み合わせ、活用していくかが課題となる。

一方、子供たちは、新聞に触れる時間よりもテレビや携帯電話・スマートフォン等に接触する時間の方が多いという。情報伝達手段にはラジオ、テレビ、新聞、書籍、インターネット等のメディアがある。それらのメディアの特性や利活用の仕方についての学習、すなわち情報モラルや情報活用能力の育成において、社会と教室での学びとのつながりを実感させるには、NIEは必要であり、効果的である。

新聞を架け橋に生き方考える

教員の自主研究組織・大分県NIE実践研究会では、「学校で学んでいること」と「私たちが暮らしている『今』『ここ』（身近な地域・日本・世界）」とが密接に結び付いていることを大切にしている。それを子供たちが知ることを通して、社会の一員としての「当事者意識」を持たせ、「世の中をよくするにはどうすればよいか」について主体的に考えて行動する学び手に育成する。それを目指して、教室と社会をつなぐNIEの実践研究を続けている。子供たちが新聞に親しみ、新聞を読んで出来事を知り、自分の考えをまとめ、発信し、考えを交流させ、よりよい社会にするための提案ができるようになることで、教室での学びを通して自分が社会とつながっていることを実感させたいという思いからである。

社会と子供たちをつなぐ架け橋としての新聞を活用して、社会や世界の動きに興味や関心を持たせ、自分の生き方を考えさせたい。そして、よりよい社会づくりに参画する力を子供たちに育むために、これまでのNIEの実践の蓄積に学び、より充実したものにしていきたい。

事例報告

カリキュラムでつなぐ児童の学びと実社会

海田町立
海田西小学校教諭
NIE アドバイザー
宮里　洋司

「何のために」「何を」「どうする」。目的と内容、方法の明確化は、授業の基本として不可欠である。本校で作成した海田西小型ＮＩＥカリキュラムはこの３要素を取り入れたデータベース型カリキュラムで、特徴は、「いつでも」「どこでも」「誰にでも」使えることである。ここでは、このカリキュラムを使うことの意味と価値について考察したい。

ＮＩＥは、実社会とのつながりから学べることが特色の一つであり、つながり方を比較・検討・選択し、よりよい授業作りのために活用するのがカリキュラムである。

カリキュラムを活用した４年生の総合的な学習の時間で、伊勢・志摩サミットで関係者向けに配られたお土産の記事を取り上げた。熊野筆が含まれることを読み取り、広島の「すごい」に関心を広げ、調べ活動へとつなぐ内容である。サミット自体の話題性もあるが、お土産に焦点化したことで関心はぐっと高まり、「もっと知りたい」という意欲へと発展させられたのは、ＮＩＥだからこそできたことである。

この実践には、「お土産」をきっかけに地域の特色について調べる学習への連続性がある。子供たちは「モルテンのバレーボール」「ヒロシマ仏壇」「広島針」など、広島の「すごい」をたくさん発見することができた。現在は「すごい！広島」をテーマに、関心のある記事を切り抜いて、感想とともに紹介する「おすすめニュース」活動を継続している。人物、自然、行事、スポーツ、産業、経済等、切り抜く記事の対象も広がりを見せたり、カープにこだわり続けたりと、一人一人の感性の輝きを如実に感じるとともに、社会への関心の高まりと広がりを感じさせる内容である。

さらに効果的だと感じるのは、記事が「今」だけでなく「今まで」「今から」も含んでいることである。現実の社会という「広さ」の横軸に加え、「過去」「現在」「未来」の縦軸があることで、子供たちは知らず知らず「知る」「考える」「比べる」「問う」「わかる」という高度な思考を展開しているのである。ＮＩＥ実践の効果は「深い学び」につながることや「課題発見・解決学習」の土台となる力を育むところにも結び付いている。

この実践は、教科との関連性、活動の継続性、活動時期等との関係から４月に行うことが効果的である。カリキュラムの効用は、これらがわかるとともに先生方の必要に応じて「同じようにしてみる」「自分なりに工夫してみる」と選択してもらい、効果的な時期に、効果的な内容で、目的に応じた工夫をしながら、「実践してもらえる」支援をすることができることである。

児童の学びと社会をつなぐカリキュラムがあり、それを「使って」「授業を作る」こと、これこそがＮＩＥカリキュラムの意味であり価値である、と私は考えている。

事例報告

投稿で「正のスパイラル」生徒の意欲を引き出す

美濃加茂市立
西中学校教諭
NIE アドバイザー
細江　隆一

わが校の国語の授業は毎年「スピーチ」からスタートする。

生徒はまず今年の目標を表す漢字を決める。次に、その漢字に決めた理由をメモする。最後に、それをもとに仲間の前でスピーチをする。国語で言う「話す・聞く」力を身につけさせるための授業である。

私が赴任する５年前までは、スピーチ原稿は作らず、箇条書きにしたメモをもとにスピーチをし、それで終わるのが通例だった。それを原稿に起こし、新聞社に投稿する現在のスタイルに５年前から変更した。

生徒の書いた作文は、投稿欄のある複数の新聞社へ送る。可能な限りたくさん掲載されることを期待するからだ。初めて送った年は、１か月もすると、１人、２人と掲載されるようになり、そこから立て続けに10人ほど掲載された。この傾向がいまも毎年続いている。

新聞への投稿は「正のスパイラル」を生徒に引き起こす。例えば、クラスメートの作文が掲載されると、他の生徒は「次は自分が」と思って努力する。また、掲載された生徒は自分の国語力に自信を持ち、ますます授業に前向きになる。そうやって国語力を伸ばす生徒をたくさん目にしてきた。

同時に、投稿は社会との接点も作り出す。ここ数年は時事問

題をテーマに、国語の授業で月1回、作文の時間を設けてきた。こうすると、生徒は新聞やテレビを興味深く眺める。学校での会話にも時事問題が入り込む。そして、作文を書く当日、誰もが作文を書くつもりで新聞やテレビを見たり、友達や家族と話したりしているからだ。

仲間の作文の掲載が自分の動機付けになる。自分の作文が掲載されれば自信になる。そして、社会との接点が新聞を通して出来上がる。これが私の言う「正のスパイラル」である。新聞への投稿を行うたび、生徒が意欲的になるのを実感する。

うれしいのは、かつての教え子の投稿文が新聞に掲載されること。時事問題に対して、自分なりの分析を行い、意見を述べている。名前を見たとたんはっとし、記事をゆっくりと読み、その出来栄えの良さに感動さえ覚える。そしてこう思う。「新聞学習を通じて構築した社会と自分との接点は、何年たっても崩れないのだ」と。

ＮＩＥの醍醐味はこれだと私は思う。社会に出る前の生徒が、社会と自ら接点を持ち、自我を確立しようとする。また、社会に出た生徒が、社会と積極的につながろうとする。これに尽きると思う。

今後もＮＩＥを通じて、社会と積極的に関わろうとする生徒を育てたい。それは私の生きがいの一つでもある。

事例報告

震災を「自分事」にするＮＩＥ

岩手県立
沼宮内高等学校教諭
NIE アドバイザー
山下　佳子

前任の岩手県立盛岡南高等学校で、２０１２年度の１学年より復興学習が本格的にスタートした。被災された岩手日報社の記者の講演や被災地でのボランティア、被災地の食材を使った文化祭での模擬店などさまざまな活動を行った（詳細は14年度岩手県教育研究発表会資料を参照されたい。http://www1.iwate-ed.jp/kenkyu/siryou/h26/h26_1904_1.pdf）。

生徒の多くが内陸部在住であり、被災地を訪れたことがある者はいても、その多くは「時間がたっているのだからある程度は復興しているのではないか」と思っていた。そこで、現地の状況を知ることが必要だと考え、新聞を活用した学習を取り入れた。講演の前には記者が震災当時や数か月後に書いた記事を送ってもらい、読んでから講演を聞いた。また、国語科の週末課題としてコラムなど新聞記事の視写を行っていたが、13年度は配布する記事に震災や復興の記事を多く取り入れた。町がなくなることで方言も消滅する恐れがあることなど、一口に震災や復興と言ってもさまざまな視点で見ることができることを学んだ。14年度には、進路希望と関連する震災・復興関係の記事のスクラップを行った。

さらに、各クラスの週番が震災関係の記事をスクラップして担任がコメントを書く「新聞スクラップリレー」に取り組んだ。総合的な学習の時間では、進路希望ごとにクラスの枠を超えてグループを作り、自分が希望する分野では被災地で何が課題になっているか新聞記事から選び、グループ内でリレーして感想を書き合い、その記事をもとに討論する活動を行った。この活動を通じて、自分の希望する進路が震災・復興と無関係ではないこと、多くの大学や企業で復興や防災に向けた活動をしていること等を知ることができ、自分も将来そのような活動に携わりたいと考える生徒が増えた。さらに自ら外部の機関に取材に行くなど学びを深め、その成果を発揮し、進路希望を実現する生徒が多かった。

「私たちは微力だが無力ではない」が学年の活動のテーマだった。自分たちの活動で何が変わるのか疑問を持っていた生徒も多い。しかし、活動の様子を地元紙に何度も掲載していただき多くの反響を得たことで、生徒たちは、マスメディアを活用すれば自分たちの思いを伝えることができるのではないかと考え始めた。

自主的に投書する生徒もいた。活動を報道してもらうことで家族や友人に思いが伝わる。発信された情報を受けて行動してくれる人や震災のことを思い出してくれる人が現れれば、風化を食い止められるのではないか。生徒たちはそう考えるようになった。「新聞に載るＮＩＥ」を彼らは体現してくれたように思う。

被災地に行くことはできなくても、新聞を通じて被災地の現状を学び、自分の生活や地域に結び付けて考えることができれば、どこで起きた震災も自分事としてとらえ、そこから学び、たとえ小さくても何らかの行動につながっていくのではないだろうか。

ニュースパークがリニューアル 7月20日オープン

ニュースパーク（日本新聞博物館）は7月20日、リニューアルオープンします。インターネットの広がりによる情報社会の進展や新聞をめぐる環境変化を踏まえ、常設展示の内容を一新しました。学校向けの体験プログラムを含め、体験と交流を通じて来館者、子供たちに学びと気付きの場を提供します。

コミュニケーション能力、読解力等を育む施設として、校外学習やＮＩＥ実践でニュースパークを活用いただければ幸いです。

現代の子供たちは玉石混交の大量の情報に囲まれて暮らしています。あふれる情報の中から正しい情報を見極める力を養うことは、ますます重要になっています。

今回新設する「情報の海」の展示ゾーンは、現代の情報社会の姿を可視化し、私たちと情報の関わり方を考えます。古代から現代までの情報化の流れを体感する「情報タイムトンネル」のほか、情報の見極めの大切さをアニメーションや漫画を通して学ぶ展示を設けています。

３階常設展示室（イメージ図）

こうした現代社会の中で、確かな情報を届ける役割を担っているのが新聞であり、新聞記者です。「真実を届ける」のゾーンは、新聞・ジャーナリズムが果たしている役割について伝えます。プライベートな側面を含め記者の素顔を知ってもらい、親しみを感じてもらうコーナーもあります。

「新聞が届くまで」は取材、編集から印刷、配達までの過程を紹介。小学5年生の「情報産業」の単元学習にも役立てていただきたいと考えています。

大型の体験ゲームとして、タブレット型端末を活用した取材体験ゲーム「横浜タイムトラベル」を導入します。参加者は過去にタイムスリップして、ペリー来航と日米和親条約の締結、山下公園や日本大通りの誕生の秘密に迫ります。楽しみながら取材を疑似体験することができます。

学校向け体験プログラムには、見出しや短い記事を書く「パソコンで新聞づくり」、新聞の読み方や新聞の役割などを解説する「新聞レクチャー」、ワークシートを手に館内を取材する「取材クルーズ」の三つを用意しました。プログラム開発には今後も積極的に取り組んでいきます。

多目的ルームは、学校団体の昼食場所としてご利用いただけます。施設の面からも、より多くの学校にお越しいただけるよう、ご要望にお応えしてまいります。（新聞協会博物館事業部）

●**埼玉県**
坂庭千絵（さかにわ・ちえ）
❶埼玉県立羽生第一高等学校
❷数学
❸２年
❹新聞は学校での知識を社会とつなぐ一つのアイテムである。新聞で視野を広げて多様な価値観に触れさせるような活動をしたい。

●**東京都**
石山智典（いしやま・とものり）
❶東京都立芝商業高等学校
❷商業
❸約20年
❹新聞を使うこと自体が目的ではなく、学校教育のさまざまな場面で、その場面に応じた目的を達成するための一つの手段として新聞を活用する。

●**長野県**
中村和彦（なかむら・かずひこ）
❶上田市立第三中学校
❷社会科
❸21年（本格的には３年）
❹とにかく新聞を活用することで、生徒の関心意欲が高まること、楽しく学びながら、ねらいに迫れることを大切に考えて実践している。

●**京都府**
伊吹侑希子（いぶき・ゆきこ）
❶京都学園中学高等学校
❷国語科
❸10年
❹学校図書館を活用し、アクティブ・ラーニングを取り入れることでメディア・リテラシーや思考力が養われる授業をめざしている。

●**兵庫県**
桝田安史（ますだ・やすし）
❶兵庫県立伊丹高等学校
❷国語科
❸５年
❹まずは先生自身が新聞を楽しんで読み、職員室でも今日の記事について会話をし、教室でいろんなときに一言二言でも伝えていくこと。

●**愛媛県**
平井慎太郎（ひらい・しんたろう）
❶愛媛県立吉田高等学校
❷公民科・地理歴史科
❸２年
❹新聞を「読む」「書く（記事を作る）」「話す（発表する）」「推論する（見出し等を考える）」ことを通じて言語活動を充実させる。

●**熊本県**
浦崎勇一（うらさき・ゆういち）
❶熊本学園大学付属高等学校
❷公民・情報
❸24年
❹記事に対する感想を学級通信に掲載することで、クラスの中で意見交流が生まれる。同じ記事に対して様々な考えがあることを学ぶ。

NIE アドバイザー紹介

❶学校名　❷担当教科　❸NIE 実践歴
❹新聞を活用するうえでの工夫を一言

（敬称略）

●北海道
朝倉一民（あさくら・かずひと）
❶札幌市立屯田北小学校
❷社会科
❸17年
❹新聞は最も新鮮な資料集。毎朝、気になる記事を紹介し、社会を見る目、考える力を鍛える。新聞を教室と社会をつなぐ窓にする。

●岩手県
茂庭隆彦（もにわ・たかひこ）
❶岩手県立岩泉高等学校
❷高等学校理科・地学
❸14年
❹自然災害から自然の原理、人間との関わり等を考えさせる授業、論説等をクリティカルシンキングで読ませ、論理的思考力を育てる実践。

●埼玉県
渡辺さかえ（わたなべ・さかえ）
❶盈進学園東野高等学校
❷地歴公民科
❸５年
❹リテラシースキルを伸ばすしかけ作り、自分の暮らす地域に起こる問題を身近なものとして捉えることのできる生徒を育てたい。

●東京都
菅井和生（すがい・かずお）
❶文京区立関口台町小学校
❷小学校全科
❸４年
❹新聞を通して、学校という枠組みから広く社会へ目を向けることを促し、「消費者」から「生産者」への意識の変革をめざしている。

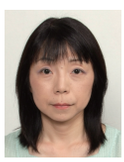
●東京都
小林豊茂（こばやし・とよしげ）
❶豊島区立明豊中学校
❷社会科
❸30年（途中、行政に10年在職してブランクがありますが）
❹新聞は、社会科には「生きた教材」としてなくてはならない教材である。今は「話せる生徒」「書ける生徒」の育成に不可欠な教材である。

●神奈川県
星野智也（ほしの・ともや）
❶神奈川県立座間総合高等学校
❷国語科
❸20年
❹「朝日 Teachers' メール」で「天声人語」を使ったオリジナル問題を作成して６年。記事を媒体としたコミュニケーションが目標。

●長野県
大澤昇治（おおさわ・しょうじ）
❶松川村立松川小学校
❷小学校全科
❸20年
❹子供たちが、新聞で他者や社会とつながるわくわく感を大切に、新聞活用の楽しさを実感し、新聞が好きになる NIE をめざしている。

●長野県
鈴木伸幸（すずき・のぶゆき）
❶飯田市立鼎小学校
❷小学校全科
❸５年
❹新聞をどのように教材化すれば、各学年の国語学習と関連させて活用することができるか、その可能性を探究し発信していきたい。

●福井県
岡本浩之（おかもと・ひろゆき）
❶福井県教育庁義務教育課
❷中学校社会科
❸18年
❹新聞を活用することで社会とつながっていることを意識できるように実践してきた。自分の考えを言える生徒を育てていきたい。

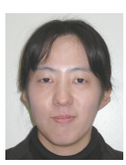


●福井県
中谷幸子（なかや・さちこ）
❶福井市豊小学校
❷小学校全科
❸10年
❹写真や見出しを効果的に使って、新聞から分かったことを伝え合う楽しさを大切にし、子供たちの「学ぶ力」を育てていきたい。

●福井県
無量小路宗洋
（むりょうこうじ・むねひろ）
❶越前市武生西小学校
❷社会・理科・体育
❸４年
❹親子で新聞記事に関する問題を作り、それをクラス全員が解き合う活動を、毎日続けている。家庭で解き、朝の会で発表し合っている。

●大阪府
徳永加代（とくなが・かよ）
❶堺市立新浅香山小学校
❷国語科
❸25年
❹指導者と学習者が「学習に役立つ記事・写真」と「その記事に関連する図書の紹介」をワークシートにまとめて、授業に活用している。

●兵庫県
若生佳久（わかお・よしひさ）
❶明石市立二見西小学校
❷社会科
❸19年
❹呼吸をするように。新聞を読むのが当たり前と思えるように。そこに新聞があり、読めるという環境づくりが大切である。



●兵庫県
佐伯奈津子（さえき・なつこ）
❶姫路市立朝日中学校
❷国語科
❸６年
❹子供たちの興味関心に沿った、その時期に合う記事を選ぶように心がけている。新聞学習を通し、自分らしい生き方ができるようになる力の育成をめざす。

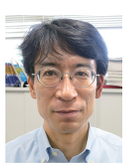
●広島県
長野由知（ながの・よしとも）
❶東広島市立小谷小学校
❷小学校全科
❸10年
❹新聞記事に書かれた人。記事を書いた人。並んだ活字の向こう側に、たくさんの人々の姿や願いがつまっていることを感じさせたい。

●広島県
宮里洋司（みやざと・ようじ）
❶海田町立海田西小学校
❷社会科
❸22年
❹子供の「なんで？」「なるほど！」「わかった!!」を引き出すこと。NIE で楽しく深く学ぶために心がけているポイントである。

●愛媛県
日野和子（ひの・かずこ）
❶西条市立庄内小学校
❷小学校全科
❸２年
❹日々、教材化という視点で新聞記事を読む。単元の最後に学習のまとめとして、キーワードとなる言葉を見出しにして新聞作りを行い、楽しみながら学習の定着が図れるようにしている。

●福岡県
中野まどか（なかの・まどか）
❶北九州市立小森江東小学校
❷小学校全科
❸10年
❹いつでも誰でも、普通に当たり前に、新聞に触れたり見たり読んだりできる環境づくり。学年の発達の段階に応じた新聞活用の授業づくり。

●福岡県
弓削淳一（ゆげ・じゅんいち）
❶福岡市立和白中学校
❷社会科
❸15年
❹新聞は学校の授業と実社会をつなぐツールととらえている。新聞を活用した「教材開発の職人」をめざし、実践の広がりに努めたい。



●長崎県
安井秀隆（やすい・ひでたか）
❶長崎県立長崎南高等学校
❷地歴公民科
❸４年（新聞部顧問としては13年）
❹授業では生徒にメディアリテラシーに関する力を少しでも身につけてもらうために、新聞制作を通じて企画・取材・原稿作成・編集を体験させている。

第2回NIE教育フォーラム

人生を切り拓く――社会とつながる 情報をいかす

新聞協会は6月4日（土）、東京・新橋の航空会館で、教育関係者らを対象に第2回NIE教育フォーラムを開催した。170人が参加。複雑で変化の激しい社会の中で、現代の子供たちがあふれる情報をどのように受け止め、取捨選択し、自分と社会とのつながりの中で活用していくか。これからの時代に必要な能力と、その育成のために求められることを考える機会とした。当日の様子はNIEウェブサイト（http://nie.jp/forum）に掲載中。

プログラム

基調講演「アクティブ・ラーニングと国語の力」
高木まさき氏（横浜国立大学教育人間科学部教授）

報告❶「若手教師に伝えたい　NIEが育む子供の力～ビジネス・学校現場の経験から～」　菅井和生氏（文京区立関口台町小学校教諭）

報告❷「タイムリーな話題でスマホやネットを考えよう！～学校でも家庭でも今すぐできる情報モラル教育～」
尾花紀子氏（ネット教育アナリスト）

報告❸「18歳選挙権時代を迎えて～主権者教育とNIE～」
宮崎三喜男氏（都立国際高等学校主任教諭）

基調講演を聞いて　アクティブ・ラーニングの重要性を実感

毎日新聞東京本社
「教育と新聞」推進本部
教育事業担当部長
戸澤　美佐

「新聞をどう教育に生かしていくのか」について、勉強中の身である。4月に現在の部署に異動。記者と編集者しかしてこなかった人間には、毎日が「？？？」の連続だ。次期学習指導要領改訂など教育関係の新聞記事を読んではいたが、実際に新聞がどのように教材として活用されているのかは、全く知らなかった。新聞協会の会議で机に置かれていたチラシを見て参加を申し込んだ。

基調講演は、横浜国立大の高木まさき教授による「アクティブ・ラーニングと国語の力」。自分で課題を見つけ、意見交換し、解決していく能動的な学習形態「アクティブ・ラーニング」は、グローバル化、複雑化する社会への対応だけでなく、将来多様な仕事をしていく子供たちにとって不可欠な学び方だ。手段として言語活動は外せない。

高木教授は講演で、今後も言語活動が重要だと指摘。「言語活動はアクティブ・ラーニングを支え、より深めていくものだが、アクティブ・ラーニングによって身についていくものでもある」と述べ、「言葉の獲得過程の富士山モデル」の図を示した。

「言葉は教科書や親が教えて覚える場合もあるが、子供は膨大な『だいたいの領域』を持っている。それが何かをきっかけとして正確に使える領域に移っていく」と説明。おおよそ理解できる大きな「言葉のすそ野」を持つことが、言語活動の基本である語彙（い）構築に大きな役割を果たすということが理解できた。

また、高校教諭時代にサッカー部顧問を務め、アクティブ・ラーニングを目の当たりにした経験を披露。弱小チームが強豪校との練習試合でボロ負けしたことで、大きな変化を遂げる。奮起した部員たちは、自分たちで練習メニューを作り、ルールを部内で共有化。大学生の指導者を見つけ練習を積み、どんどん強くなったという青春ドラマのような話。スポーツは勝つためにやるもの。生徒たちの「勝ちたい」という思いの強さが、自然にアクティブ・ラーニングにつながったのだ。

人気があるアニメや映画のヒーローは能動的なキャラクターが多い。その物語は主人公がアクティブ・ラーニング的な行動をしている姿を描いている。今、アクティブ・ラーニングが注目されているのは、社会がそういう人材を求めているからなのかもしれない。

報告で印象に残ったのは、文京区立関口台町小の菅井和生教諭による見出しを使った「ビンゴ」。すごい発想だ。見出しを読むだけで1日のニュースが分かるし、ゲーム感覚で飽きさせないのだ。何かの機会に実践で活用してみたいと思った。

報告を聞いて　今後のNIE活動の後押しに

沖縄市立
美東中学校教諭
NIE アドバイザー
松田美奈子

昨年に引き続き、今年も日帰りで参加した。当日は基調講演のほか、報告が3例あった。菅井和生先生の報告は、企業勤務を経て先生となった経験や、多角的な視点をうまく取り入れ、絶妙なバランス感覚で教育活動にNIEを生かしている様子が思い浮かび、とてもすばらしいと感じた。学校現場において、社会への関心を効果的に高めることに適したメディアについて、新聞・テレビ・本・インターネット検索など主要メディアの特徴について6項目で比較表を作

成。新聞が優位性を持っていることを示しており、今後の実践に自信となる結果だった。さらに、ＮＩＥによって多様な力が身につくが、最も大切なことは「意識を変革できること」と述べた。自己意識の変革はすべての教育活動の根源であり、自己発見力、自己肯定感、成就感の向上につながるもので、新聞の持つ力に気付かされた。次期学習指導要領の改訂では、国立教育政策研究所が研究を積み上げている「21世紀型能力」が注目されている。次期要領との整合性についても細分化して説明を加えていて分かりやすかった。

菅井先生は日常的にスクラップを行うことで、新聞と子供たち、日常生活、社会を結ぶ橋渡し役になること、「見出しビンゴゲーム」を行うことで新聞への先入観をなくし、ハードルを下げること、道徳的価値の視点を取り入れて「他者理解」を行う幅広い活用等、子供たちの実情・目線に合わせて教材をひと工夫されていて驚いた。新聞制作は、話す・聞く、読む、書く力等を循環的に伸ばすことができると聞いて、これからの大きな励みとなった。新聞の特性を生かし、教材化する教師にこそ新聞は必要という提案は、ＮＩＥの原点を見つめ直す良い機会となった。気軽な方法で継続し、他の教員・保護者も巻き込んでいくことで、小中連携・教師間の横の連携・教材の共同開発につながると実感した。

次の尾花紀子氏の報告では、スマートフォンやネットをプラス面から捉え、良い環境づくりの極意・ヒントが多数紹介されていて、学校と家庭の共通認識の重要性を改めて感じた。

最後の宮崎三喜男先生は、公民科の授業で新聞を活用し、４コマ漫画を税金の話題に置き換えた授業や、18歳選挙権時代の主権者教育として主張の違う複数紙を使ったディスカッション授業を紹介した。「子供は興味のある記事は読む。その内容を親や先生と話し合うことが大切。地域社会をどうしていきたいのかを考えることが主権者教育だ」と話していたことが印象的だった。子供たちの公正性を育み、批判的思考力を深めるために、複数紙を積極的に活用したい。

今年も有意義な時間を共有させてもらい、関係者の方々に感謝している。

ニュースを「分解」する力

SNS時代に身につけたい情報選別スキル

ヤフー株式会社　メディアカンパニー
ニュース事業本部編集部リーダー　伊藤儀雄

現在の若者は、「新聞」よりも「SNS」や「まとめサイト」からニュースなどの世の中の動きを知る―。そんな結果が2015年の日本労働組合総連合会の調査で出ている。調査対象は15歳～23歳の男女1000人。「テレビ」が最も多く、次いで「ニュースサイト」。３番手以降は「SNS」「ネット検索」「親との会話」「友人との会話」と続き、「新聞」は「まとめサイト・ニュースアプリ」よりも低い８番目だった。

言うまでもなく、ネット上には無数のニュースサイトがあり、SNSもTwitter、Facebook、Instagram、LINEをはじめ、若者の人気を得ているサービスは多い。若い人たちは日々大量の発信源から「ニュース」を摂取している。彼らのタイムラインには、悲惨な事件事故も政治経済の動きも、まとめサイトの情報もたわいもない友人同士の会話もすべてがフラットに並んでいる。その中から自分が欲しい情報を自ら選んでいる。

ネット上には有益な情報も多い。スマートフォンとSNSの普及で、事故や災害の現場でその場にいる人たちが生々しいリアルな状況を伝えることができるようになった。また、専門家や著名人が自ら発信することで、既存メディアでは伝えられなかったような、より専門的で、詳しい情報が手に入るようになった。

一方で、不正確な情報やデマ、人を傷付けるような情報も飛び交う。問題は、価値の高い情報と低い情報を選択するコストを私たち自身が負担しなければならなくなっていることだ。新聞やテレビが選別する前の大量の情報に日々私たちはさらされている。

ところがこの「選別」のスキルを持つことは容易ではない。SNSを眺めれば、立派な肩書のある社会人やメディアに関わる人たちでさえも、不正確な情報に振り回されている事例に突き当たることも少なくない。情報選別のトレーニングを受ける機会の少ない学生・若者であればなおさらだ。誤った情報に惑わされ続ければ、進学・就職といった人生の重要場面での選択で後に後悔する判断をしかねない。

だからといって、信頼できる情報源だけに情報摂取の範囲を狭めるわけにもいかないだろう。SNSはもはやインフラになっているし、世の中が複雑化し続ける中でネットにしか存在しない貴重な情報も多い。

その中では基礎的な情報選別の訓練が欠かせない。例えば現代文の読解のように、ニュースを「分解」してみることがひとつの方策だろう。単純な事件の記事ひとつとっても、「警察の発表文」「捜査関係者からの取材」「現場周辺の取材」「過去の資料」など複数の情報源から構成されていることがわかる。

ネット上に流通する「記事」は新聞記事だけではない。そんなさまざまな記事を「分解」してみると、必要な取材が行われていなかったり、伝聞や推測だけで書かれていたりして信用するに足らない記事が数多くあることが実感を伴って理解できるだろう。

NIEでいきいき

本校では、言語力の基礎を育てる「ことばの教育三本柱」の一つとして「読解力向上」「図書館活用」とともに、「ＮＩＥ推進」の実践を積み重ねてきている。

先頃、５年生では、説明文の学習のゴールに、新聞による交流を設定し授業を行った。この学習は、前単元での新聞の紙面構成や記事の作り方の学習と関連を図りながら展開したものである。説明文の要旨や筆者の考えに対する自分の考えを盛り込みながら、しっかりとした構成の新聞を完成させることができ、読み手を意識した新聞形式による情報発信のよさを実感する学習となった（**写真上**）。このような取り組みを一例として、本校では教師の新聞活用への意識が高く、他の教科などでも発達段階に応じてさまざまに試みられている。

また、本年度より新たに、毎週木曜日を「朝倉小新聞の日」とし、朝のＮＩＥタイムの拡充を図っている。具体的には３年生以上の児童一人一人が、子供新聞を一斉に開き、15分間たっぷり読むものである（**写真下**）。横手市で行われる「全市新聞の日」（小中を対象として年３回実施）では１、２年生を含めた全校一斉の活動ともなる。継続する中で、「毎週木曜日が待ち遠しい」「気になる記事やおもしろい記事に興味が持てる」といった声が多く聞かれるようになった。新聞を購読しない家庭が増える中で、自分だけの新聞を手にすることは、子供たちの知的好奇心を大いに刺激している。

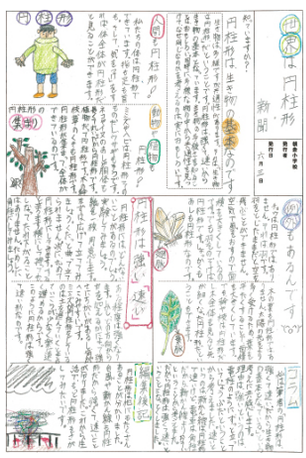
これからも、新聞に身近に触れられる環境を整え、言葉の力と社会を見る目を持った「あさくらっ子」の育成に努めていきたい。

横手市立朝倉小学校

教諭　谷藤　暁

◎秋田県横手市／校長：奥　秀輝／児童数３３８人（４月１日現在）

◎特色：学校経営目標「やさしく　かしこく　たくましく」の具現の柱をしてきた「ことばの教育三本柱」（ＮＩＥ推進・読解力向上・学校図書館活用）の継続が、自分を表現する力を蓄えた底力のある子供たちへと成長させている。考えをつないで思いを伝え合い、学ぶ楽しさと分かる喜びのある学習がどの教室でも展開されている。



事務局長から一言

小正月行事「かまくら」で有名な横手市は、県内でもＮＩＥ活動に熱心な自治体の一つだ。

市立朝倉小学校は２００９～11年度、13～16年度の実践指定校。秋田市で昨夏開催されたＮＩＥ全国大会秋田大会では公開授業を実施。新聞記事をもとにふるさとの課題を把握し、調べて伝える学習を通じて、子供たちが自らの変化を振り返る取り組みをアピールした。

校内には新聞閲覧台を設け、昼休みは児童会のメンバーが気になる新聞記事を校内放送で紹介。授業での記事活用だけでなく、新聞が身近にある環境づくりに力を入れている。新聞によって「言葉の力」を育む実践は、着実に実りをもたらしている。

（秋田県ＮＩＥ推進協議会事務局長・齊藤敦）

NIEあれこれ

島根県ＮＩＥ推進協議会は今春、創立20周年記念誌を発行した。タイトルが「楽しくやろう！ＮＩＥ」。島根のＮＩＥのモットー「楽しくなければＮＩＥではない」から採ったものだ。

◆島根県の場合、２年間の実践期間が終わっても継続を希望する学校が圧倒的に多い。一度実践指定校をやってみたら意外と楽しかった、ということなのだろうか。継続希望校はそれだけ意欲があるということで、原則認めており、過去には７年間継続した高校もある◆「あんなに熱心にＮＩＥに取り組んでいただいて、普段の授業に影響は出ませんでしたか」。今春実践を終了した、ある小学校の先生に恐る恐る尋ねてみた。答えは「それは全然ありませんでした。私たちもとても楽しかったです」。これこそ島根が目指すＮＩＥ。事務局としてホッと胸をなでおろした。**（山陰中央新報社・水野幸雄）**